

## 研究拠点形成事業 平成 26 年度 実施計画書

### B. アジア・アフリカ学術基盤形成型

#### 1. 拠点機関

日本側拠点機関：	九州大学
(インドネシア) 拠点機関：	ガジャマダ大学
(タイ) 拠点機関：	チュラロンコン大学
(フィリピン) 拠点機関：	フィリピン大学
(モンゴル) 拠点機関：	モンゴル科学技術大学
(アルジェリア) 拠点機関：	ハウアリブーメディエン科学技術大学
(エジプト) 拠点機関：	エジプト核物質科学研究所

#### 2. 研究交流課題名

(和文)：アジア・アフリカ地球資源コンソーシアム創成と若手資源研究者育成

(交流分野：地球資源工学)

(英文)：New Consortium Creation and Cultivation of Young Scientist on Earth Resources in Asia and Africa Region

(交流分野：Earth Resources Engineering)

研究交流課題に係るホームページ：<http://xrd.mine.kyushu-u.ac.jp/project.html>

#### 3. 採用期間

平成 26 年 4 月 1 日 ～ 平成 29 年 3 月 31 日

( 1 年度目)

#### 4. 実施体制

##### 日本側実施組織

拠点機関：九州大学

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：総長・有川節夫

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：工学研究院・教授・渡邊公一郎

協力機関：秋田大学、独立行政法人産業技術総合研究所、北海道大学

事務組織：九州大学国際部国際企画課

**相手国側実施組織**（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

(1) 国名： インドネシア

拠点機関：(英文) Gadjah Mada University

(和文) ガジャマダ大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

Department of Geological Engineering,  
Associate Professor, Agung HARIJOKO

協力機関：(英文) Padjadjaran University, Institute of Bandung Technology,  
Hasanuddin University

(和文) パジャジャラン大学、バンドン工科大学、ハサヌディン大学

(2) 国名：タイ

拠点機関：(英文) Chulalongkorn University

(和文) チュラロンコン大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

Department of Mining and Petroleum Engineering,  
Associate Professor, Pinyo MEECHUMNA

協力機関：(英文)

(和文)

(3) 国名：フィリピン

拠点機関：(英文) University of the Philippines

(和文) フィリピン大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

College of Science, Professor, Carla DIMALANTA

協力機関：(英文)

(和文)

(4) 国名：モンゴル

拠点機関：(英文) Mongolian University, Science and Technology

(和文) モンゴル科技大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

School of Geology and Petroleum Engineering, Associate Professor,  
Jargalan SEREENEN

協力機関：(英文)

(和文)

(5) 国名：アルジェリア

拠点機関：(英文) University of Science and Technology, Houari Boumediene

(和文) ホウアリブーメディエン科学技術大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文)

Department of Geology, Professor, Omar KOLLI

協力機関：(英文) Anaba University, Mawloud University, Mhamed Bougara University

(和文) アナバ大学、モウルード大学、ムハメドボーガラ大学

(6) 国名：エジプト

拠点機関：(英文) Nuclear Materials Authority

(和文) エジプト核物質科学研究所

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文)

Department of Geology and Exploration, Professor,

Mohammed AHMADY

協力機関：(英文)

(和文)

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

鉱物・エネルギー資源貧国日本が工業先進国であり続けるには、産業の上流となる資源を確保し続ける必要がある。あるいは、資源リサイクルや近年注目されている国内の海洋資源の開発も視野に入れる必要がある。このような地球資源の探査・開発技術、リサイクル技術、さらには資源開発に伴う環境へのインパクトを最小限にする技術は、我が国が世界最先端にある。一方、アジア・アフリカ地域には有望な地球資源がありながらもそれらを探査し、環境に負荷をかけない次世代型の開発技術がない。また、アジア・アフリカ地域の地球資源は、依然、欧米資源企業の搾取の対象となっており、途上国の資源が国造りに活かされていない。このような現状を踏まえ、地球資源が豊かであるが技術がなく、技術者が育っていないアジア・アフリカの途上国と、資源に乏しいが環境低負荷型の資源関連技術を擁する日本が連携すると、両者の将来にわたる安定的な共存関係を強め、ひいてはアジア・アフリカの平和的発展に貢献することが可能となる。本研究交流の第一の目標は、日本を機軸としてアジア・アフリカの研究者と共同で資源開発技術や資源量評価技術の開発を進め、各資源鉱床の成因解明や資源探査技術の向上を図ることである。これらを通して地球資源研究を加速し、情報を共有し、さらに、将来にわたる研究基盤を構築する。

第二の目標は、アジア・アフリカの若手研究者に、グローバルな研究交流の場を与え、また、日本の最新技術に触れる機会を用意することである。さらに、日本の資源分野の若手研究者や学生にアジア・アフリカの研究者と交流する機会を与え、我が国の主力となる

グローバル人材として育成することを目指す。

これまでの3年間で、アジア・アフリカ地域の特に、アセアン及び北アフリカ諸国を中心とした鉱物資源分野の研究交流と若手研究育成を実施した。次の3年間は、これまでの実績を生かし、アセアンの新拠点のフィリピン、さらにモンゴルやアフリカ中南部を加え、また、分野も鉱物資源にエネルギー資源も含めた包括的な地球資源を対象として、アジア・アフリカにおける実践的な地球資源コンソーシアム形成を目指す。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

平成26年度から開始

## 7. 平成26年度研究交流目標

### <研究協力体制の構築>

H23-25年度に実施してきたアジア・アフリカ学術基盤形成事業も含めて、これまでに日本側拠点機関である九州大学が独自に構築してきた地球資源工学分野における九州大学とアジア・アフリカ地域の各拠点・協力機関との間のつながりを確認するとともに、アジア・アフリカ地域の各拠点・協力機関同士のつながり、すなわちネットワーク構築へと拡大することである。特に、H23-25年度のアジア・アフリカ学術基盤形成事業では九州大学ともとより繋がりがあった国とはさらに研究活動を深化させ、拠点機関以外の機関との連携のきっかけを得てきたので、それら機関との連携の拡大を目指す。また、将来的なパートナーシップを結ぶうえで、各周辺諸国（例えば、モロッコ・モーリタニア・ミャンマーなど）の研究者を巻き込むような形での発展を目指すための情報収集や交流を開始する。

### <学術的観点>

資源地質学の研究分野はこれまで欧米を中心として研究が進んできたが、日本の研究レベルもかなり向上している状況である。これらの国が協力して、世界を支える資源国であるアジア・アフリカ諸国の研究のレベルを引き上げることを目指し、日本の拠点・協力機関に加え、協力研究者として複数の研究者を欧州よりメンバーに加えることで、全体の学術レベルの向上、特に同位体分野での向上を目指す。アジア・アフリカの資源国をフィールド研究の対象とし、我が国と相手国の研究者による共同研究を実施し、これまでに蓄積された資源関連技術や研究に、我が国の持つ鉱床成因モデリングなど新たな視点を加え、そこにさらに協力研究者の協力を仰いでより高いレベルの学術結果を出すことを目指す。また、途上国における資源開発は環境問題に苦しんでいる。資源の効率的な探査・開発とともに、環境低負荷技術が非常に重要であり、その分野での貢献もまた目標とするところである。本年度の目標はアジア・アフリカにおける質の高い新しい地球資源に関する学術研究を開始し、上記目標に向けて、次年度以降の礎とすることとする。

### <若手研究者育成>

地球資源分野のグローバルな人材が日本では特に枯渇しているため、将来を担う修士・

博士の日本人学生を積極的にアジア・アフリカ地域における資源調査フィールドに送り、そこで海外拠点・協力機関の専門家及び現地の若手研究者との国際共同研究の一端を担わせることで、多くの経験を積ませる。そこで得られる地球資源工学的データの蓄積・研究の推進もまた可能な限りアジア・アフリカの現地拠点機関と共同研究という形で促す。また、アジア・アフリカの若手研究者には、地球資源の有効な探査・活用法について日本側の機関との接点を通して学んでもらい、特に欧州からの協力研究者をも巻き込んだどのような資源に対してどのような研究アプローチがあり、どのような分析をすればその資源探査・評価が可能かといった教育を実践的に行う。

#### <その他（社会貢献や独自の目的等）>

学術成果については結果がまとまり次第、随時公表をしていくとともに、ホームページでの活動の周知などを行う。地球資源分野のコンソーシアムを柔軟に発展させるために、現在、拠点・協力機関になっていない国についても積極的なはたらきかけを行い、若手世代の交流を特に、一方的な派遣あるいは受入ではなく双方向で行う。

## 8. 平成26年度研究交流計画状況

### 8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) インドネシアにおける金・レアメタル資源調査 (英文) Investigation of Gold and Rare Metals Deposits in Indonesia				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 米津幸太郎・九州大学・准教授 (英文) Kotaro YONEZU・Kyushu University・Associate Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Agung HARIJOKO, Department of Geological Engineering, Gadjah Mada University, Associate Professor				
参加者数	日本側参加者数		9名		
	(インドネシア)側参加者数		6名		
26年度の 研究交流活動 計画	若手研究者を含む日本側とインドネシア側の双方の研究者により研究打ち合わせを行った後に、共同でフィールド調査を行い、特にインドネシアのジャワ島の熱水性の金鉱床、スラベシ島の金-銅鉱床、カリマンタン島の希土類資源調査、ハルマヘラ島の金鉱床調査を行い、鉱床の成因・資源量並びにエネルギー量の基礎的評価を行う。				

26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	インドネシアの西ジャワ地域における金を中心とする金属鉱床の成因、金-銅を中心とするスラベシ島の金属鉱床の成因、カリマンタン島の希土類資源やハルマヘラ島の金鉱床の鉱量・成因評価を日本・インドネシアの若手研究者を含む共同研究グループにより行い、若手を含む人材交流に加え、学術的に評価されるような新知見を獲得することが期待できる。
---	--

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) インドシナ半島における金属資源形成の時空間関連性 (英文) Temporal and Spatial relationship among the generation of metallic deposit in Indochina Peninsula.				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 渡邊公一郎・九州大学・教授 (英文) Koichiro WATANABE・Kyushu University・Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Pinyo MEECHUMNA, Department of Mining and Petroleum Engineering, Chulalongkorn University, Associate Professor				
参加者数	日本側参加者数	7 名			
	(タイ) 側参加者数	4 名			
26年度の 研究交流活動 計画	若手研究者を含む日本側とタイ側の双方の研究者により研究打ち合わせを行った後に、共同でフィールド調査を行い、特にタイ中部の金鉱床、マレーシア北部の金鉱床及び周辺国（ミャンマー、カンボジア）の花崗岩に伴われる貴金属、卑金属鉱床の成因と資源量、そして形成年代を明らかにするための研究に着手する。				
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	インドシナ半島はタイ、マレーシアのみならず貴金属、卑金属の宝庫である。それら金属鉱床を包括的に取り扱うべく、まずはタイ・マレーシアの金属鉱床の形成の時空間関係を明らかにすることが期待される。また、次年度以降に周辺国へ研究対象地域を広げるための予察的な調査や情報収集を行うことにより、金属鉱床の半島全体への広がり把握することができると期待される。				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) フィリピンにおけるニッケルラテライトに付随する希土類資源調査				
	(英文) Resource Potential Analysis of Rare Earth Elements Associated with Ni-laterite deposit in Philippines				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 米津幸太郎・九州大学・准教授				
	(英文) Kotaro YONEZU・Kyushu University・Associate Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	(英文) Carla DIMALANTA, College of Science, University of the Philippines, Professor				
参加者数	日本側参加者数	5 名			
	(フィリピン) 側参加者数	4 名			
26年度の 研究交流活動 計画	若手研究者を含む日本側とフィリピン側の双方の研究者により研究打ち合わせを行った後に、共同でフィールド調査を行い、主としてパラワン島及びノノック島のニッケルラテライト鉱床の調査を行い、主要元素・微量元素・極微量元素まで定量し、有用金属資源、特に希土類資源の資源量評価と希土類元素の濃集機構の解明に取り組む。				
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	ニッケルラテライト鉱床にしばしば伴われる有用金属元素の自然界での挙動に関する知見を得るとともに、その挙動を室内実験を用いて解明するためのモデリングを行うことが期待できる。また、希土類元素以外にも白金族元素に関する定量結果を得ることで、次年度以降の研究の発展性を探索することが可能となる。				

整理番号	R-4	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) モンゴル南部における金資源・希土類資源探査				
	(英文) Exploration of Gold and Rare Earth Elements Resource in Southern Mongolia				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 中西哲也・九州大学・准教授				
	(英文) Tetsuya NAKANISHI・Kyushu University・Associate Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	(英文) Jargalan SEREENEN, School of Geology and Petroleum Engineering, Mongolian University, Science and Technology, Associate Professor,				

参加者数	日本側参加者数	6名
	(モンゴル)側参加者数	1名
26年度の 研究交流活動 計画	若手研究者を含む日本側とモンゴル側の双方の研究者により研究打ち合わせを行った後に、共同でフィールド調査を行い、主として南部の金鉱床及び希土類鉱床・鉱徴地を調査し、資源ポテンシャル評価を行う。	
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	金鉱床に関しては、その成因を探る基礎研究も並行して行い、鉱床の生成条件の一端を明らかにできると考えられる。また、希土類資源鉱床については、鉱床タイプ、希土類元素含有量の調査をいくつかの地域で行って基礎的なデータを採取することが期待できる。	

整理番号	R-5	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) アルジェリアにおけるレアメタル資源調査				
	(英文) Investigation of Rare Metals in Algeria				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 渡邊公一郎・九州大学・教授				
	(英文) Koichiro Watanabe・Kyushu University・Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Omar KOLLI・Department of Geology, University of Science and Technology Houari Boumediene・Professor				
参加者数	日本側参加者数	5名			
	(アルジェリア)側参加者数	6名			
26年度の 研究交流活動 計画	若手研究者を含む日本側とアルジェリア側の双方の研究者により研究打ち合わせを行った後に、フィールド調査を行い、南部のレアメタルを伴う花崗岩やレアアースを伴う炭酸塩岩を中心に採取する。それらの化学分析を通じて、どのようなレアメタルがどの程度、含有されているか、また抽出実験によりそれらレアメタルがどのような存在形態をしているのかを明らかにする。				
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	レアメタルを伴う花崗岩の特徴とそのレアメタル含有量をもとに資源量の評価を行うことが期待できる。また、炭酸塩岩は、新鮮な岩石と風化した岩石の分析を行うことで、両者間におけるレアアースの挙動を明らかにすることが期待される。				



整理番号	R-6	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) エジプトにおける有用金属資源の探査と再評価				
	(英文) Exploration and Re-evaluation of valuable metal resource in Egypt				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 米津幸太郎・九州大学・准教授				
	(英文) Kotaro YONEZU・Kyushu University・Associate Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Mohammed AHMADY, Department of Geology and Exploration, Nuclear Materials Authority, Professor				
参加者数	日本側参加者数	4 名			
	(エジプト) 側参加者数	4 名			
26年度の 研究交流活動 計画	エジプトでは、これまでに多くの資源探査がなされてきたが、その精度は必ずしも良くない。そこで、シナイ半島の希土類資源、東砂漠地域の金・レアメタル資源の資源量を再評価するとともに、周辺地域の新たな鉱徴地についての基礎的な地質調査を若手研究者を含む日本側とエジプト側の双方の研究者により行う。試料採取についてはこれまでに複数回行っており、それらデータの精査と新たな試料の追加をエジプト側で、その化学分析等を日本側で分担することとする。				
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	これまでの資源量に関するデータと新たなデータの比較、最適な分析方法の検討に結果に一定の解が出るのが期待できる。また、各種鉱床・鉱徴地の広がりを衛星データ等を使って解析することで、より確度のある資源量調査結果が出るのが期待される。				

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「第4回アジア・アフリカ鉱物資源会議」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “ 4th Asia Africa Mineral Resources Conference “
開催期間	平成 26 年 10 月 13 日 ～ 平成 26 年 10 月 16 日 ( 4 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) アルジェリア・アルジェ・ハウアリブームディエン科学技術大学
	(英文) University of Science and Technology, Houari Boumediene, Alger, Algeria
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 渡邊公一郎・九州大学・教授
	(英文) Koichiro Watanabe・Kyushu University・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Omar KOLLI・Department of Geology, University of Science and Technology Houari Boumediene・Professor

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (アルジェリア)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	10/ 70	
	B.	10	
インドネシア 〈人／人日〉	A.	5/ 35	
	B.		
タイ 〈人／人日〉	A.	4/ 28	
	B.		
フィリピン 〈人／人日〉	A.	2/ 14	
	B.	2	
モンゴル 〈人／人日〉	A.	1/ 7	
	B.		
アルジェリア 〈人／人日〉	A.	6/ 24	
	B.	20	
エジプト 〈人／人日〉	A.	4/ 24	
	B.	2	
合計 〈人／人日〉	A.	32/ 202	
	B.	34	

- A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）  
 B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>日本及び海外拠点機関の貴金属・レアメタル資源を含む鉱物資源の開発・探査の現状とこれまでの研究成果あるいはこれからの研究計画についての発表と忌憚のない議論を通じて、情報の共有化を図る。初年度にあたる本年度は各国の資源事情の共通認識と日本を含めアジアにとってなじみの薄いアフリカの資源に関する知識・情報・現状の認識の場とする。また、会議に引き続きアルジェリア北部の鉛・亜鉛を主とする卑金属鉱床を訪問する地質巡検を通して、さらなる知識交換や研究者交流を図り、今後につながるネットワーク環境の整備を行う。特に若手研究者には積極的な会議での発表と地質巡検の企画・運営を実行してもらいながら、交流と経験を深める場とする。</p>
<p>期待される成果</p>	<p>日本側拠点機関と相手国拠点側の関係は、本事業前から構築されてきており、本事業の共同研究を通してさらに深めることができる。また、新たな顔合わせの場としての機能や若手研究者同士の交流、刺激の場となることが期待できる。これまでにアフリカ諸国の研究者を日本を含むアジア地域へ招くという活動は試みられてきたが、その逆のアジア諸国の研究者をアフリカへ動かすという試みは地球資源分野では行われてきておらず、若手のみならず専門家にとっても非常に貴重な経験と刺激の場となることが期待できる。そこで生まれるエネルギーを新たな研究へと向かわせていくことができると期待している。地質巡検ではアジア地域にはないタイプの卑金属鉱床を目にすることにより、より知識を深めるとともに、新たな知見が得られることが期待できる。</p>
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>日本側責任者：渡邊公一郎（九州大学・教授）          アルジェリア側責任者：Omar KOLLI（ハウアリブームディエン科学技術大・教授）          事務局長（国際）：米津幸太郎（九州大学・准教授）          事務局長（アルジェリア）：Boutaleb ABDELHAK（ハウアリブームディエン科学技術大・教授）          運営委員会メンバー：今井亮（秋田大学・教授）、高橋亮平（秋田大学・助教）、中西哲也（九州大学・准教授）、Jillian Gabo（九州大学・学術研究員）、Thomas Tindell（九州大学・助教）、ハウアリブームディエン科学技術大学・地質学科教員</p>

	協力メンバー：九州大学大学院地球資源システム工学専攻並びに ホウアリブーメディエン科学技術大学、若手研究者（大学院生含 む）													
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>外国旅費</td> <td>5000 千円</td> </tr> <tr> <td>謝金</td> <td>40 千円</td> </tr> <tr> <td>消耗品等</td> <td>30 千円</td> </tr> <tr> <td>その他（会議・巡検）</td> <td>300 千円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費等消費税</td> <td>200 千円</td> </tr> </tbody> </table>	内容	金額	外国旅費	5000 千円	謝金	40 千円	消耗品等	30 千円	その他（会議・巡検）	300 千円	外国旅費等消費税	200 千円
	内容	金額												
外国旅費	5000 千円													
謝金	40 千円													
消耗品等	30 千円													
その他（会議・巡検）	300 千円													
外国旅費等消費税	200 千円													
(アルジェリア) 側	<table border="1"> <tbody> <tr> <td>会議・巡検費</td> <td>200 千円</td> </tr> <tr> <td>国内旅費</td> <td>250 千円</td> </tr> </tbody> </table>	会議・巡検費	200 千円	国内旅費	250 千円									
会議・巡検費	200 千円													
国内旅費	250 千円													

### 8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

平成 26 年度は実施しない

## 9. 平成26年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣 派遣元	日本 〈人/人日〉	インドネシア 〈人/人日〉	タイ 〈人/人日〉	フィリピン 〈人/人日〉	モンゴル 〈人/人日〉	アルジェリア 〈人/人日〉	エジプト 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		2/14 ( 6/42 )	2/14 ( 3/21 )	3/21 ( 5/35 )	2/16 ( 2/16 )	10/70 ( 10/70 )	0/0 ( 2/16 )	19/135 ( 28/200 )
インドネシア 〈人/人日〉	1/10 ( 4/40 )		0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 2/14 )	0/0 ( 0/0 )	5/35 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	6/45 ( 6/54 )
タイ 〈人/人日〉	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 2/10 )		0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	4/28 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	4/28 ( 2/10 )
フィリピン 〈人/人日〉	0/0 ( 2/14 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )		0/0 ( 0/0 )	2/14 ( 2/14 )	0/0 ( 0/0 )	2/14 ( 4/28 )
モンゴル 〈人/人日〉	0/0 ( 1/10 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )		1/7 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/7 ( 1/10 )
アルジェリア 〈人/人日〉	0/0 ( 2/20 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )		0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 2/20 )
エジプト 〈人/人日〉	0/0 ( 1/10 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	4/24 ( 0/0 )		4/24 ( 1/10 )
合計 〈人/人日〉	1/10 ( 10/94 )	2/14 ( 8/52 )	2/14 ( 3/21 )	3/21 ( 7/49 )	2/16 ( 2/16 )	26/178 ( 12/84 )	0/0 ( 2/16 )	36/253 ( 44/332 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

### 9-2 国内での交流計画

0/0 ( 人/人日 )
--------------

## 10. 平成26年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	0	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	6,090,000	
	謝金	140,000	
	備品・消耗品 購入費	160,000	
	その他の経費	550,000	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	260,000	
	計	7,200,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		720,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		7,920,000	